

令和 7 年度病虫害発生予報第 2 号の発表について

このことについて、次のとおり発表したので送付します。

《予報の概要》

作物名	病 害 虫 名	予想発生量	作物名	病 害 虫 名	予想発生量
麦 類	赤かび病	やや多	タマネギ	べと病	少
	黒節病	並		腐敗病	やや少
	裸黒穂病	並		ネギアザミウマ	やや多
	アブラムシ類	並	ニンニク	春腐病	やや少
水 稻	イネミズゾウムシ	並		さび病	少
				ネギアザミウマ	やや多
カンキツ	黒点病	やや少	アスパラガ ス	ネギアザミウマ	やや多
	かいよう病	並		ハダニ類	やや多
	灰色かび病	並		アブラムシ類	やや多
	アブラムシ類	やや少	イチゴ (本圃)	うどんこ病	やや少
	ミカンハダニ	多		アブラムシ類	やや多
モ モ	せん孔細菌病	並		ハダニ類	やや多
	灰星病	並		アザミウマ類	やや多
	モモハモグリガ	少			
	アブラムシ類	並			
	ナシヒメシンクイ	並			
カ キ	炭疽病	並			
	うどんこ病	並			
	フジコナカイガラムシ	並			
ブドウ	べと病	やや少			
果樹の 共通害虫	クワゴマダラヒトリ	やや少			
	カメムシ類	やや少			
	ハマキムシ類	やや多			

太文字の病虫害：向こう 1 か月の間、発生状況に特に注意を要する病虫害を示す。

* 予報根拠中の記号

(+)：発生量を多くする要因

(-)：発生量を少なくする要因

(±)：発生量が平年並になる要因

令和7年度 病虫害発生予報 第2号（5月）

A. 麦類の病虫害

1. 赤かび病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 4月下旬のはだか麦および4月上中旬の小麦での発生は平年と同様に認められなかった。(±)

(2) 4月下旬の赤かび病感染・発病好適条件の発現回数は平年並であった。(±)

(3) はだか麦および小麦の開花期は平年よりもやや遅かった。(＋)

(4) 5月の気象は、気温が平年並か高く(＋)、降水量はほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 発生を認めた圃場では早急に追加防除を実施する。

(2) 播種期別の開花期や感染・発病好適条件の発現状況などを病虫害防除所のホームページ(<https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>)に掲載しているので、防除時期を参考に的確な防除を実施する。

(3) 適期に収穫し、被害粒が発生した場合はライスグレーダーを用いて被害粒の除去に努める。

2. 黒節病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 4月下旬のはだか麦での発生量は平年並(±)、4月中旬の小麦での発生は平年と同様に認められなかった(±)。

対 策 本病は種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

3. 裸黒穂病

予 想 対象作物： はだか麦

発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 4月下旬のはだか麦での発生は平年と同様に認められなかった。(±)

対 策 (1) 本病は種子伝染するので発病圃場からは採種しない。

(2) 本病対象の種子消毒を徹底する。

4. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 (1) 4月下旬のはだか麦および4月上中旬の小麦での発生量はやや多かった。(＋)

(2) 県予察圃場での4月下旬のはだか麦での発生量は少なく(－)、小麦での発生量はやや少なかった。(－)

対 策 1穂当たり7～11頭(寄生穂率に換算すると60～80%)寄生している圃場では、早急に防除を実施する。

B. 水稻の病害虫

1. イネミズゾウムシ

予 想 発生地域： 県内全域

発生時期： 早い（越冬成虫50%飛翔開始時期：4月第5半旬）

発生量： 並

根 拠 (1) 越冬成虫の飛翔に必要な有効積算温度の達成時期は早かった。（+）

(2) 前年の第1世代成虫の発生量は、早短期水稻では少なく（-）、普通期水稻では平年並であった（±）。

(3) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。（+）

対 策 (1) 前年、発生が多かった地域では、移植前に育苗箱施薬を行う。本虫対象の育苗箱施薬を行っていない圃場では、本田期の薬剤防除を行う。

(2) 根が健全に育つようにできるだけ浅水管理し、成虫の葉の食害が多い圃場では早めに中干しを行うことで幼虫の被害が軽減できる。

C. 果樹の病害虫

—カンキツ—

1. 黒点病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は少なかった。（-）

(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

対 策 伝染源である枯枝を除去し、5月中下旬に薬剤を散布する。

2. かいよう病

予 想 発生地域： 中晩生カンキツ栽培地

発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生は平年と同様に認められなかった。（±）

(2) 5月の気象は、気温が平年並か高く（+）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 (1) 適正な肥培管理を行い、樹勢を健全に保つ。

(2) 前年の罹病した枝葉は除去する。

(3) 防風対策を行い、新葉の損傷を防止する。

(4) 中晩生カンキツ等の罹病性品種は、5月下旬に薬剤防除を実施する。

3. 灰色かび病

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： 並

根 拠 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

対 策 満開期から落弁期にかけて、薬液が花弁に十分かかるように散布する。

4. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： やや少

根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生は認められなかった。（-）

(2) 一般圃場での4月下旬の発生は認められなかった。（-）

(3) 5月の気象は、気温が平年並か高く（+）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 寄生を認めたら早めに薬剤防除を実施する。

5. ミカンハダニ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 多

根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量は多かった。(+)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生量は多かった。(+)
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。

対 策 (1) 100葉調査で、1葉当たりの寄生雌成虫数が0.5～1頭になれば防除する。
(2) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーモ モー

1. せん孔細菌病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 県予察圃場での4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(3) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 例年発生の多い園地では、定期的に薬剤防除を実施するとともに、果実への感染を防止するため早めに袋かけを行う。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) ストレプトマイシン剤（アタッキン水和剤含む）を使用する場合は、収穫前日数に注意する。
(4) 発病枝は伝染源となるので、見つけ次第除去し、処分する。
(5) 病原菌は葉や果実の自然の開口部（気孔、水孔等）や傷口から侵入するので、風当たりの強い園地では防風ネット等の防風対策を施すとともに、コスカシバ、キクイムシ、モモハモグリガ等の害虫防除を徹底し樹勢低下を防止する。

2. 灰星病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

根 拠 (1) 一般圃場での4月下旬の花腐れの発生は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 (1) 5月下旬から定期的に薬剤防除を実施する。
(2) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(3) 例年発生の多い園地では、5月中旬～6月中旬に2～3回薬剤防除を実施する。

3. モモハモグリガ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 少

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける誘殺は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 一般圃場では4月下旬の発生は認めなかった。(－)

対 策 5月中旬の第一世代成虫最盛期に薬剤防除を実施する。

4. アブラムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並

- 根 拠 (1) 県予察圃場では4月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 寄生を認めたなら早めに薬剤防除を実施する。

5. ナシヒメシンクイ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおける誘殺数は平年並であった。(±)
(2) 県予察圃場での4月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(3) 一般圃場では4月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(4) 5月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 早めに袋がけを行い、無袋栽培では10日間隔で薬剤防除を実施する。
(2) 芯折れ枝を早めに剪除し、中から幼虫が脱出するのを防ぐ。
(3) 樹上及び地面に落下した被害果は処分する。

ーカ キー

1. 炭疽病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は、気温が平年並か高く(+)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 発病枝は見つけ次第除去し、処分する。
(2) 前年多発した園地では、5月中旬～6月中旬に2～3回薬剤防除を実施する。

2. うどんこ病

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での4月下旬の発生は平年と同様に認められなかった。(±)
(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 新梢伸長期(5月中下旬)に1～2回薬剤防除を実施する。

3. フジコナカイガラムシ

- 予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 並
- 根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量は平年並であった。(±)
(2) 一般圃場での4月下旬の発生は認められなかった。(－)
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) フジコナカイガラムシの成虫、卵のう、3齢幼虫はろう物質に覆われ薬液をはじいてしまい、薬剤による防除効果が劣ることがあるため、1～2齢幼虫主体の時に薬剤散布する。
(2) 本種は薬剤がかかりにくい新梢基部や樹皮の隙間に潜っており、薬剤のかけむらがないように十分な薬量をていねいに散布する。特にスピードスプレー(SS)による防除では、かけむらができないよう注意する。

ーブドウー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 一般圃場での前年秋期の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)

対 策 初期感染防止のため、5月上旬に薬剤防除を実施する。薬剤散布は十分かかるよう、丁寧に実施する。

ー果樹の共通害虫ー

1. クワゴマダラヒトリ

予 想 対象作物： カンキツ、モモ、カキ、ブドウ、ナシ、ビワ、
キウイフルーツ等

発生地域： 山林隣接園地
発生量： やや少

根 拠 (1) 前年秋期の産卵植物（アカメガシワ）での巣網の発生量はやや少なかった。(－)
(2) 春期の産卵植物（アカメガシワ）周辺の雑草において、越冬幼虫の発生は平年並であった。(±)

対 策 (1) 園地内の雑草などでの発生が多い場合は、直ちに防除する。とくに雑木林に近い園地周辺部での発生状況に注意する。
(2) 老齢幼虫には効果が劣るので、防除が遅れないように注意する。

2. カメムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

根 拠 (1) 4月の県予察圃場予察灯の誘殺は認められなかった。(－)
(2) 4月の綾歌郡綾川町の予察灯の誘殺数は平年並であった。(±)

対 策 (1) モモ、ウメ、スモモ、アンズ、ナシ等は、幼果期から被害を受ける場合があるので、有袋栽培では、できるだけ早く袋かけを行う。
(2) 施設栽培の場合は、開放口をネット（4mm目合い）で覆うとカメムシ類の侵入防止対策となる。
(3) 圃場内をよく観察し、被害果実やカメムシ類の発生が見られる場合は、早急に薬剤散布を実施する。特にスギ、ヒノキ等が周辺に多い圃場や、過去に被害が認められた圃場では注意する。
(4) 多発してからの薬剤散布では防除効果が劣るので、発生初期の散布を徹底する。
(5) 成虫は夕方に飛来し夜間加害するので、薬剤散布は夕方に広域かつ一斉に行うと効果的である。
(6) 黄色蛍光灯は、チャバネアオカメムシには忌避効果があるが、ほかのカメムシには効果がないので注意する。
(7) 防除薬剤は、香川県監修の果樹病虫害防除暦を参考にする。

3. ハマキムシ類

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

根 拠 (1) 県予察圃場のフェロモントラップにおけるチャノコカクモンハマキの誘殺数は平年並であった。(±)
(2) カキの一般圃場での4月下旬の発生量は多かった。(＋)

- (3) 5月の気象は、気温が平年並か高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

対 策 幼虫発生期に防除する。

D. 野菜、花きの病害虫

ータマネギー

1. ベと病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： 少

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生は認められなかった。（－）
(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 圃場の排水を良くするとともに、窒素質肥料の過不足がないよう肥培管理する。
(2) 越年罹病株は見つけ次第抜き取って圃場外に持ち出すなど適正に処分する。
(3) メタラキシル、マンゼブまたはフルアジナムを含む薬剤、ベンチアバリカルブ等のCAA系薬剤をローテーションで散布する。
(4) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。
(5) タマネギと同一の病原菌によって発生するネギのべと病にも注意する。

2. 腐敗病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。（±）

- 対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。
(2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。
(3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜き取り、適正に処分する。
(4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。
(5) 窒素質肥料の過不足を避ける。

3. ネギアザミウマ

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： **やや多**

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや少なかった。（－）
(2) 県予察ほ場での4月下旬の発生量は多かった。（＋）
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高く（＋）、降水量がほぼ平年並（±）の予報である。

- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーニンニクー

1. 春腐病

予 想 発生地域： 県内全域
発生量： やや少

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
 (2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) 発生圃場では、7～10日間隔で薬剤防除を行う。湿潤な天候が続き、急増が予想される場合には、抗生物質剤を主体に5～7日間隔で防除を行う。
 (2) 病原菌は茎葉の傷口から侵入するので、強風雨や農作業の前後に防除を行うとともに、ネギアザミウマなど害虫防除を行う。
 (3) 伝染源となる腐敗株を早期に抜取り、適正に処分する。
 (4) 排水不良は発病を助長するので、明渠などによって排水対策を徹底する。
 (5) 窒素質肥料の過不足を避ける。
 (6) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギの腐敗病にも注意する。

2. さび病

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： 少
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生は認められなかった。(－)
 (2) 5月の気象は、降水量がほぼ平年並の予報である。(±)
- 対 策 (1) ミクロブタニル、シメコナゾールまたはアゾキシストロビンを含む薬剤を収穫前日数に注意して散布する。
 (2) 同一の病原菌によって発生するタマネギ、ネギ、ニラのさび病にも注意する。

3. ネギアザミウマ

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (2) タマネギの県予察ほ場での4月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (3) 5月の気象は、気温が平年並か高く(＋)、降水量がほぼ平年並(±)の予報である。
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (2) ネギアザミウマの食害痕から病原菌が侵入する場合があるので、葉に食害が認められる場合は早期に防除を行う。
 (3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

ーアスパラガスー

1. ネギアザミウマ

- 予 想 発生地域： 県内全域
 発生量： **やや多**
- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
 (2) タマネギの県予察ほ場での4月下旬の発生量は多かった。(＋)
 (3) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
 (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
 (3) 圃場内の数か所で成茎の擬葉が繁茂しているところを手で払って、10×20cm程の板上に1か所当たり1～5頭の成虫を認めたら防除する。
 (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. ハダニ類

- 予 想 発生地域： 県内全域

発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 刈り取った茎葉は圃場から持ち出し、処分する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. アブラムシ類

予 想 発生地域 : 県内全域
発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での4月のアブラムシ類の誘殺数は、平年並であった。(±)
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 施設の開口部を防虫ネットで被覆したり、光反射資材を施設周縁部に敷設するなどして、侵入防止対策を講じる。
(2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統薬剤を連用しない。

－イチゴ（施設本圃）－

1. うどんこ病

予 想 発生地域 : 県内全域
発生量 : **やや少**

- 根 拠 4月下旬の発生量はやや少なかった。(－)
- 対 策 (1) 薬剤防除は予防的に実施し、初期感染を防ぎ、発病を認めたら、発生初期から5～7日間隔で行う。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 耐性菌の発生回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

2. アブラムシ類

予 想 発生地域 : 県内全域
発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 綾歌郡綾川町の黄色水盤での4月のアブラムシ類の誘殺数は、平年並であった。(±)
(3) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
(2) 茎葉が繁茂していると薬剤が十分に到達しにくい場合があるので、丁寧に散布する。
(3) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

3. ハダニ類

予 想 発生地域 : 県内全域
発生量 : **やや多**

- 根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)
(2) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)
- 対 策 (1) 人による持ち込みを回避するため、発生圃場に入った着衣のまま未発生圃場に立ち入らない。

- (2) 圃場内及び圃場周辺の除草に努める。
- (3) 発生が局所的な場合には、気門封鎖剤のスポット散布を行う。
- (4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

4. アザミウマ類

予 想 発生地域： 県内全域

発生量： **やや多**

根 拠 (1) 4月下旬の発生量は平年並であった。(±)

(2) 5月の気象は、気温が平年並か高い予報である。(＋)

対 策 (1) 施設内及び圃場周辺の除草に努める。

(2) 青色粘着トラップを設置して、発生及び侵入状況を早期に確認する。

(3) 花における発生状況をよく観察し、寄生成虫数が100花当たりで10頭になった時または成虫の寄生花率が10%になった時に防除を実施する。

(4) 抵抗性の発達回避のため、同一系統の薬剤を連用しない。

・住宅地等に接した地域及び広範囲に防除する場合は、散布する前に付近住民などに周知するとともに、飛散しにくい農薬を使用するようにしましょう。

・農薬散布は、無風又は風が弱いときに行うなど、近隣に影響が少ない天候の日や時間帯を選び、風向き、ノズルの向き等に注意して飛散防止を心がけましょう。

農薬はラベルをよく読んで使用しましょう

病害虫防除所インターネットホームページ

URL: <https://www.pref.kagawa.lg.jp/byogaichuboj/index.html>

